皆様の課題をICTで解決する
DAiKO
http://www.daikodenshi.jp
FUJITSU
パートナー
大興電子通信株式会社

CHIBA UNIVERSITY PRESS 江戸川大学 ユニバーシティプレス

大学生記者が編集

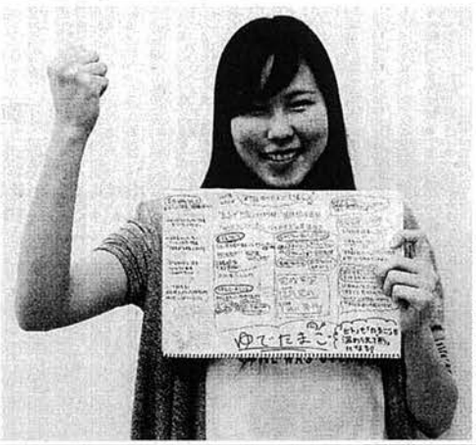
施設退所後の不安解消

社会生活ガイドブック作成

経験者の声を基に

来年1月の配布目指す

児童養護施設出身で代表の阿部さん



「ゆでたまご」代表の阿部華奈絵さん

有志団体「ゆでたまご」

駅で切符の買い方がわからない。ATM（現金自動預払機）でお金を下ろせない。ふつうに育った人なら、なぜそんなことが分からないのかと首をかしげてしまうことが、児童養護施設を退所する若者を悩ませる。施設での生活は社会とのつながりが少ないまま、18歳で独り立ちしなくてはならない。そんな若者のために「～ゆでたまご～社会的養護退所後ガイドブック作成委員会」は、2017年12月の完成を目指して施設退所者を支援するための『社会的養護施設退所後ガイドブック』を作成している。

家庭の貧困や親の虐待…。そんな事情や悩みを抱えた子供たちが親と離れ暮らす場所が児童養護施設だ。だが、高校卒業と同時に自立をしなければならない。ゆでたまご代表、阿部華奈絵さん(20)もその一人である。

5歳の時に母親が再婚、小学1年のときに弟が誕生しその後、中学3年まで義父に虐待を受けながら生活していたという。友人がこれに気づき、学校の先生と児童相談所を訪れ、今までの経緯を話した。その後、児童養護施設に入り、高校3年間を過ごした。

退所後、いざ自立した生活を始めると当たり前の生活が全然できなかった。銀行でお金の振り込み方や電車の乗り方、国民保険や家財保険の支払い方、保証人問題や家賃の更新料など普段生活する上で当たり前に覚えることを施設では教えてもらえない。

『社会的養護施設退所後ガイドブック』は阿部さん自身の経験や、児童養護施設を経験した若者たちのアンケートを基に編集されている。退所後に知っておいた方が良い問題の解決方法、施設当事者が支援団体を知らない現実に対処すべく、支援先の情報を掲載する。

同ガイドブックは、17年12月の完成を目標とし、18年1月から東京の児童養護施設への無償配布を目指す。東京だけでなく、千葉県や神奈川県など地域の実情に合わせたガイドブックも作り、同様に無償配布することも視野に入れているという。こうしたガイドブックを無償で配布することは支援団体として、初の試みとなる。（佐々木　翼）

夢実現へ経済的支援を

退所控えた高校生

施設の合宿に密着

4月3、4日の2日間、千葉県立鴨川青年の家で、いすみ市にある児童養護施設小山ホームの高校生が合宿を行った。同施設には県内の2歳から18歳までの子供たち63人が生活している。

合宿では小山ホームのルールの再確認などが行われた。記者も合宿に参加し、取材を行った。

将来の夢がアニメ声優だと言うAさんは「一人暮らしや専門学校にかかるお金が不安だ」と話す。

また、将来はラーメン屋を立ち上げたいというB君は「退所後の支援先があること自体知らない」とも言う。取材を行った高校生たちのほとんどが経済的な問題を抱えつつも高校生たち全員が将来の夢を持ち、退所後の生活を自分なりに考えていた。

同施設の職員、木村健司さん(35)は「実際に退所してから社会生活での困難を経験し気付くことが多いので、少しでもツールとしてガイドブックを活用できれば良い」と期待を語った。

小山ホームの高校生たちが２日間合宿を行った

退所後の進学率は、奨学金などが充実していることから、なんとか大学に行ける人が増えてきているという。施設で生活できるうちに奨学金の話やお金の使い方を教える機会を設けているが、実際に経験してみないと分からない事が多いという。（佐々木　翼）

生の声で話し合い

月１回の会議で内容議論

日大文理学部での「ゆでたまご会議」の様子

4月20日、午後6時から東京都世田谷区にある日本大学文理学部の教室で「第七回ゆでたまご会議」が行われた。ゆでたまご会議はガイドブック完成に向けて月1回行われる。今回の会議は、阿部さんや施設退所者の実際の経験なども基に進められた。メンバーは職種も年齢もさまざまで、阿部さん、井上教授を含む15人が参加した。メンバーの中には阿部さんや川瀬さんを含め施設出身者もおり、生の声が聴ける。会議の内容は、ガイドブックのレイアウト案作成、PR方法の模索、ガイドブックの内容の決定を行った。ガイドブックの内容の話し合いでは、積極的な意見の交換が行われた。施設退所者の目線に立ち、生の声を会議で話し合うことで『社会的養護退所後ガイドブック』の完成を目指している。（溝辺　奈菜）

「当事者の声を伝えたい」

施設内の教員 川瀬さん

「退所者の孤立を無くしたい」と語る川瀬さん

ゆでたまごのメンバーの一員であり、県内の児童自立支援施設内の学校で教員をしている川瀬信一さん(29)は「当事者の生の声を伝えたい」と語る。

児童自立支援施設とは元々いた家庭や、暮らしていた施設などでうまく生活することができず、問題行動や不適応を起こしてしまったような子たちが保護される施設だ。

川瀬さん自身も小学校の頃、家がごみ屋敷となってしまい家族とうまく生活をすることができなくなってしまった。学校に行かなくなったこともあり、児童相談所に一時保護された。川瀬さんは自分で里親を希望する意思を伝え、柏市内の里親のもとで暮らすことになった。しかしそこでもうまく生活することができなかった。

「施設を出た後はいろいろ後ろ盾がなくなる」。気が付かないうちに周りとのつながりが失われてしまい、一人ぼっちになっているという。

当事者にとってどんなサポートが必要なのか、川瀬さんは自身の経験も踏まえながら、ゆでたまごの活動に参加しており、施設退所後の孤立を無くしたいと願っている。（内藤　圭子）

作成者の熱意重要

日大文理学部教授の井上氏

児童養護について語る井上教授

「ゆでたまご」は井上教授(66)のサポートの下で活動している。阿部さんとの出会いは昨年1月に行われた、里親に育った子供たちの自立を考えるシンポジウムでのこと。施設を退所した後に困ったことを解決する情報を提供したいと相談を持ちかけた。井上教授は大学時代様々なボランティアに協力し、東京都の職員として、児童養護施設で勤めた経験がある。現在、大学で児童福祉関係を中心に講義している。「一回できたからって完成にならない」。継続していくことが大事なので作成者の熱意が大変重要になってくる。（佐藤　友美）